



南湖は、福島県内の生き物の研究者にとって憧れの地でした。これまでに行われた断片的な調査から、希少な生き物がたくさん報告されていたからです。今まで本格的な学術調査が行われなかったのが不思議なくらいのとおきの場所でした。

「南湖の生き物調査をやろう」。

この言葉に、県内で活躍する専門家達が二つ返事で引き受けてくれました。期待に違わず、トウゴクヘラオモダカ（水生植物）、マルタンヤンマ（昆虫類）、ルイスツブゲンゴロウ（昆虫類）、マ

メシジミ類（貝類）と調査のたびごとに貴重な生き物の発見があり、「南湖の凄さ」を再確認しました。これは嬉しいことでした。

一方で、調べれば調べるほど、1960年代以降の環境変化によって多くの貴重種が姿を消し、全国レベルで貴重だった自然の大部分が失われてしまったことも明らかになりました。これは悲しいことでした。幸い、南湖の自然は里山・里地とも称される二次的自然で、適切な管理が行われれば、ある程度は回復できます。

適切な管理を継続的に行うためには、管理者や地元住民が南湖の自然や生物多様性に関心を持ち、価値を正しく理解する必要があります。

一人でも多くの方が、このガイドブックを持って南湖を散策し、そこに暮らす生き物とその生態に興味を持ち、南湖の価値についての理解するきっかけとなれば幸いです。



南湖のいきもの植物編 (第1版)

森林生・草地生植物、湿地生植物、水生植物

平成20年3月発行

執筆者・写真（五十音順）

薄葉 満（水草研究会、福島県植物研究会）水生植物
黒沢高秀（福島大学共生システム理工学類）森林生・草地生植物、湿地生植物
椎名亮介（椎名亮介写真事務所）写真

協力者一覧（敬称略五十音順）

薄葉 正雄 [写真提供]
岡 千照 [写真提供]
小林 星 [写真提供]
近内 裕子 [写真提供]

編集

黒沢 高秀（福島大学共生システム理工学類）

レイアウト

薄葉 正雄（白河市）
高橋 正人（福島県南建設事務所）
邊見和歌子（太陽測量設計株式会社）

発行者

福島県南建設事務所 企画管理部 企画調査課
住所 〒961-0971 福島県白河市昭和町269番地
電話 0248-23-1617
FAX 0248-23-1642
E-mail kennan.ken@pref.fukushima.jp
白河市 建設部 都市計画課
住所 〒961-8602 福島県白河市八幡小路7番地1
電話 0248-22-1111 内線 2286
FAX 0248-24-1844
E-mail toshikeikaku@city.shirakawa.fukushima.jp

本パンフレットは、元気ふくしま、地域づくり・交流促進事業により発行しました。内容には平成18年度及び19年度福島大学・県南建設事務所共同研究「南湖公園保全・活用計画策定における基礎資料作成」の成果の一部を含んでいます。

南湖のいきもの 植物編

森林生・草地生植物 湿地生植物 水生植物



ヤマユリ



ノアザミ



コバキボウシ



ゼンテイカ（別名ニコウキスゲ）



イバラモ



シラカワコウホネ（仮称）

南湖のいきもの 植物編

黒沢高秀・薄葉 満

南湖の湖内とその周辺には、350種類を越える植物が生育している。貴重な植物も多く、コウホネ属植物、イバラモ、オオトリゲモの3種類は福島県内で南湖にしか生育が知られていない。環境省や福島県が現在絶滅危惧種に指定している植物が、10種類以上も生育しているが、過去には約40種類もの記録がある。ミズゴケ湿原や広大なヨシの湿地など昔の環境が残っていれば、絶滅危惧植物集中地域として全国的に有名になっていたであろう。

現在見られる主な植物を、鏡の山や周回道沿いの森林や草地生の植物、松虫の原や湖岸の湿地生の植物、湖内の水生植物に分けて紹介する。

鏡の山や周回道沿いの森林生・草地生植物

鏡の山はかつて豊かな林床植物があったようであるが、今は一面キイチゴ属などの藪に覆われてしまい、あまり当時の面影がないようである。周回道沿いにはなじみの人里の植物が見られる。(執筆：黒沢高秀)



ヤマユリ

里山に多く、大きな花が親しまれてきた多年草。独特の芳香も持つ。アカマツ林など明るい林で、よく手入れ(下草刈り等)をすると見事な群落になる。

1999年7月24日(鏡の山) 写真:椎名亮介



ゼンテイカ

別名ニッコウキスゲ。尾瀬や雄国沼の大群落が有名であるが丘陵地にも現れる。ヤブカンソウに似るが花が淡く、一重咲きで、より清楚な美しさがある。

2000年6月3日(鏡の山) 写真:椎名亮介



チゴユリ

春の里山の林の下で多く見られる多年草。可憐な小さな百合なので稚児百合。

2000年5月22日(鏡の山)
写真:椎名亮介



ヤマジノホトトギス

遊歩道沿いなどで見られる多年草。名は花の斑点模様が鳥のホトトギスの胸の模様にも似るため。

2000年8月30日(鏡の山)
写真:椎名亮介



オオヒヨドリバナ

高さ1~2mになる大形の多年草。夏から秋、ヒヨドリがよく鳴く頃に咲くことによる名。

2000年7月10日(鏡の山)
写真:椎名亮介



ヤブカンゾウ

八重咲きでオレンジの花が林や草むらの中でひととき目立つ多年草。ゼンテイカの仲間。

2000年7月16日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



オオバジャノヒゲ

暗い場所など森林下の他の草が少ないところに生える多年草。コバルト色の実(実際は種子)が美しい。

2000年7月5日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



オオバギボウシ

森林下に生える多年草。類似したコバギボウシより葉が大きく、花も大きく淡い。

2000年6月27日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



マムシグサ

筒状の構造に包まれた不思議な形をした花をつける多年草。名は芽だし時の色彩や模様がマムシに似るため。

2000年5月27日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



オクモミジハグマ

モミジに似た形の葉をつける、森林に多くみられる多年草。長く伸びた穂のような茎に花を並べる。

2000年8月30日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



ベニバナボロギク

熱帯アフリカ原産の帰化植物。一年草だが1m近くに達する。紅色がかった花は横や下を向く。

2000年9月14日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



ノアザミ

春から初夏に咲く、1mに達するアザミ。葉にトゲが多く、花のまわりが粘つく。

2000年6月3日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



ミヤマヨメナ

林下に生える野菊の仲間。花の色の濃い園芸品はミヤコワスレの名などで販売される。

2000年5月23日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



ヤクシソウ

秋に枝先に多数の黄色い花をつける多年草。基部が茎を囲むような特徴的な葉を持つ。

2000年9月14日(鏡の山)
写真: 椎名亮介

南湖のいきもの

森林生・草地生植物



ホタルブクロ

里山に多い多年草。白っぽい花から、写真のように赤紫の強いものまで変化がある。名は花にホタルを入れて楽しんだことによる。掘り取ってしまう人がいるが、南湖を彩る植物として野生で楽しみたい。2000年7月5日(鏡の山) 写真: 椎名亮介



ヘクソカズラ

林の縁や草むらなど南湖の至る所にあるつる性多年草。名は全体が悪臭を持つことによる。別名ヤイトバナ。花の上面が灸(=やいと)の跡に似ることによる。枯れた蔓や果実はリースに利用される。2000年8月30日(鏡の山) 写真: 椎名亮介



オカトラノオ

白い花を多数つけたアーチ状の花序が特徴的な多年草。花序を虎の尾に見立てた名。山野に多い。

2000年7月2日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



ミヤマタムラソウ

夏の林下に1cm程度の淡く青い花を咲かせる多年草。サルビアの仲間。

2000年7月24日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



キバナアキギリ

秋の林下に多い、3cm程度の淡黄色の花を咲かせる多年草。サルビアの仲間。

2000年9月14日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



ウツボグサ

夏の歩道沿いに多い多年草。花穂を矢の入れ物(うつぼ)に見立てた。

2000年7月10日(鏡の山)
写真: 椎名亮介



タチツボスミレ

道端などでいちばん普通に見られる、薄い青~白っぽい色のスミレ。

2006年5月1日(花月橋周辺)
写真: 小林星



ヤマブキ

春先に鮮やかな黄色で里山を彩る低木。特に林の縁や石垣、明るい林の中に多い。

2006年5月1日(共楽亭周辺)
写真: 岡千照



カキドオシ

春の歩道沿いに多い多年草。匍匐枝が長く伸びる様から籬通（垣根を通す）の名がある。

2000年5月23日（鏡の山）
写真：椎名亮介



キヌタソウ

鏡の山のアカマツ林の所々に生える多年草。葉が4枚（うち、本物の葉は2枚）が輪生する。

2000年7月10日（鏡の山）
写真：椎名亮介



ツルリンドウ

森林に生えるつる性の多年草。秋にはあざやかな濃赤色の果実をつける。

2000年8月30日（鏡の山）
写真：椎名亮介



クズ

草地や林縁に蔓延するつる性の多年草。根は葛根で、食用の葛粉の原料となる。

2000年8月30日（鏡の山）
写真：椎名亮介



チダケシ

湿った場所に生える多年草で、鏡の山以外にも南湖岸周辺や松虫の原に多い。

2000年7月5日（鏡の山）
写真：椎名亮介



タケニグサ

日当たりの良い場所に生える、1～2mに達する多年草。折ると黄色い液が出る。

2000年7月24日（鏡の山）
写真：椎名亮介



イカリソウ

錨（いかり）のような形の花の先に花蜜がある。マルハナバチのみに蜜を与える工夫である。

2000年5月23日（鏡の山）
写真：椎名亮介



フタリシズカ

やや暗い森林に多い多年草。花穂が2本のことが多い。ヒトリシズカの仲間。

2000年5月31日（鏡の山）
写真：椎名亮介



ドクダミ

湿ったところに多い、全体に異臭を持つ多年草。薬用茶の原料となる。

2000年6月27日（鏡の山）
写真：椎名亮介

湖岸と松虫の原の湿地生植物

湿地には特有な植物が生育するが、南湖の湿地には珍しい植物が多い。あまり手を加えられずに残された松虫の原には、サクラバハンノキやカキツバタなど多くの貴重な植物が生育している。花月橋の西側に広がる、埋立を免れた松林の林床の湿地や、小規模なヨシ原も貴重である。(執筆：黒沢高秀)



カキツバタ

5～6月に松虫の原で咲く紫色のアヤメ属植物。アヤメとは花の様相が異なり、花びらに太い薄黄色の線があるのみである。湿地の開発などで減少しており、環境省が絶滅危惧植物に指定している。

2007年5月31日(松虫の原)
写真:黒沢高秀



キシウブ

南湖に多い黄色いアヤメ。見た目はきれいだが、繁殖力旺盛で、カキツバタなどを脅かし、目立つため景観も変容させてしまうヨーロッパ原産の外来植物。環境省が要注意外来生物に指定している。

2007年5月31日(松虫の原)
写真:岡千照



ヤマアワ

松虫の原などの湿った草地に多い多年草。小穂(イネの籾殻にあたる)が針のように細い。

2000年7月16日(松虫の原)
写真:椎名亮介



ウシノシッペイ

湿地に生える多年草。独特な形の花序を、牛を叩く竹製の杖(しっぺい)に見立てた名。

2006年8月17日(花月橋～有明崎)
写真:黒沢高秀



コマツカサススキ

水辺に生える多年草。小さな松かさのような花序が、枝先に集まっている。

2006年8月17日(共楽亭周辺)
写真:黒沢高秀

南湖のいきもの しっ ち せい しょく ぶつ 湿地生植物



サクラバハノキ

湿地に生える夏緑高木で、ハノキに似るが葉の表面に多少光沢があり、基部が円形～浅心形、側脈が9～12対である（ハノキは基部がくさび形、側脈が7～9対）。県指定の絶滅危惧植物。2007年5月31日（松虫の原）写真：黒沢高秀



オオハンゴンソウ

一見ヒマワリに似てきれいな花であるが、裏磐梯など各地で猛威をふるっている悪名高い外来植物。環境省特定外来生物指定。すでに松虫の原に多数が侵入しており、被害が心配される。2000年7月16日（松虫の原周辺）写真：椎名亮介



ハッカ

葉や茎から独特の芳香を放つ多年草。ヨシ湿地など湿った場所に生える。

2006年8月17日（花月橋～有明崎）
写真：黒沢高秀



ヌマトラノオ

南湖の水辺に多い、白い可憐な花を咲かせる多年草。鏡の山等のオカトラノオより小さい。

2000年7月16日（松虫の原）
写真：椎名亮介



クサレダマ

湿った草地で黄色い花の目立つ多年草。腐れ玉ではなく、草レダマ。レダマは豆の一種。

2000年7月24日（松虫の原）
写真：椎名亮介



ゴキツル

南湖のヨシ湿地に生える、繊細なつる植物。花も実も緑色。福島県内では希。

2006年8月17日（花月橋～有明崎）
写真：黒沢高秀



タチカモメヅル

福島県内では希とされる多年草。湿ったアカマツ林や湿地に生え、先が蔓になる。

2006年8月17日（花月橋～千世の堤）
写真：黒沢高秀



アオタチカモメヅル

タチカモメヅルに似るが、花が黄色い。同様に湿った場所に生え、福島県内では希とされる。

2006年8月17日（花月橋～千世の堤）
写真：黒沢高秀



イヌゴマ

果実が胡麻に似るのでこの名があるが、ゴマとは縁が遠く、シソ科の植物。

2000年7月16日(松虫の原)
写真:椎名亮介



コバギボウシ

うす青紫の花が可憐なギボウシの仲間、樹林下や草地の湿った場所に群生する。

2001年8月13日(松虫の原)
写真:椎名亮介



オニスゲ

水辺に群生するスゲの仲間。1 cm近い先の尖った細長い果実が特徴的。

2006年8月17日(花月橋〜有明崎)
写真:黒沢高秀



ミズバショウ

文献に全く出てこないのもともとも南湖にあった植物ではなさそうです。 2006年5月1日(松虫の原)
写真:岡千照



コオニユリ

夏の松虫の原を彩る橙色の百合。オニユリによく似るがムカゴがない。 2007年7月25日(松虫の原)
写真:薄葉正雄



アヤメ

花びらの基部が黄色で青い網状模様が目立つ。松虫の原に少数生える。 2007年5月31日(松虫の原)
写真:黒沢高秀

南湖に忍び寄る「侵略的外来植物」

日本には1000種類を越える外来植物(もともとその地域にいなかった種類の生物、帰化植物)が生育している。オオイヌノフグリやヒメオドリコソウ、セイヨウタンポポなど道端の小さな植物をイメージすることが多いであろう。実際、大部分の外来植物は人為的影響の強い市街地や路傍のような環境でしか生活できない。ところが、ごく一部であるが、自然度の高い生態系に侵入し、競争などにより貴重な植物を消滅に追い込むような植物もある。このような植物を侵略的外来植物という。植物に限らず、侵略的外来生物から日本特有の自然や農水産物を守るために、2004年に外来生物法が制定された。この法律では、特定外来生物の栽培や保管が禁止されている。また、それに準ずる要注意外来生物も定められている。

南湖は実は侵略的外来植物の楽園になりつつあった。湖水内でオールが漕げないほど大繁茂していたのは、琵琶湖や尾瀬沼で悪名をとどろかせた要注意外来生物のコカナダモであった。裏磐梯や八幡平で猛威をふるっている特定外来生物のオオハンゴンソウや福島県の河川敷や土手の大きな面積を既に埋め尽くしてしまったアレチウリが既に松虫の原に侵入している。要注意外来生物のキショウブも水辺一面に黄色い花を咲かせていて、特に松虫の原では絶滅危惧植物のカキツバタにとって、危険な存在になっている(写真1)。オオハンゴンソウやキショウブは花が目立つため、景観や雰囲気も一変させてしまう。

南湖の生物多様性を守るため、また南湖の価値である歴史性や景観を守るため、これらの侵略的外来植物の駆除の試みが2006年から始まった(写真2)。一度定着し繁茂した侵略的外来植物を根絶するのは容易ではない。全国で進んでいる事例を参考に、市民の協力を得ながら息の長い取り組みをしていかなければならない。



写真1 松虫の原で外来種キショウブ(黄色)の間に点々と咲く在来種カキツバタ(青色)。



写真2 2007年に駆除された1.8トンのコカナダモ。

湖水内の水生植物

南湖には、現在、約25種類の水生植物が生育しているが、それらは、生活様式から沈水性、浮葉性、抽水性、浮遊性のグループに分けられる。

沈水性のグループのうち、最も広範囲に生育しているのはコカナダモで、ほぼ全域で見られる。これに混じってイバラモ、オオトリゲモ、イトイバラモ、エビモなどがモザイク状に、また、コカナダモの見られない北岸と南岸の一部には、クロモやセキシウモが小群落を形成している。

浮葉性の植物では、ヒシが最も広範囲に生育し、主に、西岸寄りの水面にマット状の群落を形成している。一方、南岸の排水口周辺にはオヒルムシロ、東岸の堰堤寄りにはヒルムシロがやや大きな群落を形成している。また、中央付近には、しばしばホソバミズヒキモがみられ、南東部及び北東部ではスイレン（栽培種）が群落を拡大している。

抽水性の植物としては、ヨシ、マコモ、クログワイ、カンガレイ、ウキヤガラなどが西岸から南岸にかけて小群落を形成しているほか、わずかではあるが、南西岸の湿地にはトウゴクヘラオモダカやミズニラが生育している。

これらのほか、諸所に浮遊性のウキクサとアオウキクサがみられる。（執筆：薄葉満）



イバラモ

沈水性。葉は線形で硬質。縁にトゲがある。水中の葉腋に、ごく小さな花をつける。雄花は雄蕊1本、雌花は雌蕊1本のみ。福島県では南湖以外に確認されていない。福島県絶滅危惧II類。 2006年8月31日 写真：黒沢高秀



コカナダモ

沈水性。茎の各節に葉を2~3枚ずつ輪生する。北アメリカ原産の帰化植物で、南湖には1990年代に侵入したものとみられ、水域全体に広がって、在来種の生育を脅かしている。 2006年8月31日 写真：黒沢高秀



クロモ

沈水性。コカナダモに似ているが、在来種で、葉は4~6枚輪生している。

2007年8月20日(常磐清水付近)
写真：薄葉 満



スイレン

浮葉性。大きな偏円形の葉と白色の花をつける栽培種。自然の豊かさを示す植物ではない。

1989年10月5日(眞萩が浦~月見が浦)
写真：薄葉 満



ヒシ

浮葉性。水面に菱状三角形の葉を放射状に広げ、トゲのある大きな果実をつける。

2007年8月4日
写真：近内裕子

南湖のいきもの すいせいしょくぶつ 水生植物



イトイバラモ

沈水性。オオトリゲモに似ているが、葉の反り返りがより少なく、種子表面の網目模様は縦長。福島県の生育地は、南湖ほか1ヶ所のみ。環境省絶滅危惧ⅠB類。
2007年8月20日(眞萩が浦～月見が浦) 写真:薄葉 満



オオトリゲモ

沈水性。イバラモのようにトゲがあるが、葉がより細く、反り返っている。全体がもろく、引くとバラバラになりやすい。種子表面の網目模様が横長。福島県の生育地は、南湖ほか1ヶ所のみ。 2006年8月27日(水月橋付近) 写真:薄葉 満



ヒルムシロ

浮葉性。長楕円状被針形の浮葉と、柄のある薄く柔らかな沈水葉をつける。心皮は1～3個。
2007年8月20日(常磐清水付近) 写真:薄葉 満



ホソバミズヒキモ

浮葉性。ヒルムシロに似ているが、浮葉が1～3cmと小さく、沈水葉が針状になる点が異なる。
2006年8月31日 写真:黒沢高秀



オヒルムシロ

浮葉性。ヒルムシロに似ているが、沈水葉が針状で、心皮が4個である点が異なる。
2007年8月4日 写真:近内裕子

南湖を特徴づける水生植物 (1) シラカワコウホネ (仮称)



コウホネに似ているが、浮葉を生じ、柱頭盤が赤色を呈する。この点では、オゼコウホネを連想させるが、浮葉が長楕円状被針形で、しばしば抽水葉を生ずること、葯がより大きく且つ葯と花糸の長さの比が小さい点で異なる。サイジョウコウホネとする説もあるが、それより浮葉がやや長めで軟質であり、葉裏の毛も少ない。また、雄蕊の葯がサイジョウコウホネよりは小さいなど、一致しない点がある。南湖以外では見られず、その正体については、新しい分類群の可能性も含めて研究中である。

<写真左: 1980年代のシラカワコウホネの群集
写真右: シラカワコウホネの花の拡大>



注) 本種は、二度目の浚渫時にほぼ絶滅したものとみられていたが、その後、北岸と南岸の一部に数株ずつ生育していることが確認されている。しかし、それらは、浚渫以前のものとは比べて葯が大きく、浮葉がやや硬質で卵状長楕円形を呈するなど微妙な違いが認められる。

南湖公園内採集標品目録（白河第一尋常小学校1911?）、史跡名勝南湖公園保存管理計画書（白河市教育委員会1982）及び白河市史（白河市2001）によれば、1950年代以前の南湖には、西岸から南岸にかけて広い湿地があり、岸边にはコウホネ、ミツガシワ、カキツバタ、ウキヤガラ、ミミカキグサ類など、沖にはジュンサイ、ヒツジグサ、ヒルムシロ、セキシウモなどが生育していた。また、大学や博物館に収蔵されている標本から、当時はヤマトミクリ、ヒメミクリ、オオフトイ、トウゴクヘラオモダカ、アギナシなども生育していたことがわかる。ところが、1960年代に大規模な浚渫工事があり、湿地及び湖水内の水生植物の多くが失われ、湖内の景観に大きな変化が生じた。

1970年代にはジュンサイ、ヒツジグサ、ヒルムシロ、セキシウモが復活したほか、クロモ、イトモ、エビモ、ヤナギモ、イバラモ、イヌタヌキモ、オヒルムシロ、クログワイ、アシカキなども確認された。しかし、抽水性のヤマトミクリ、オオフトイ、コウホネなどは、群落としては再びよみがえることがなく、かわりに、浮葉を生じ柱頭盤が赤くなるシラカワコウホネ（仮称）が優占するようになった。このような植生の変化は、浚渫によって岸边の浅瀬が奪われたことと関係がある。

ところが、1990年代に再び浚渫が行なわれ、いったん復活したジュンサイやヒツジグサは再び姿を消すこととなった。そればかりでなく、この後イヌタヌキモ、イトモ、ヤナギモ、アシカキ、シズイ、アギナシ、ヒメミクリ、ミツガシワなど、南湖のフロラ（植物相）を豊かにしていた水生植物の多くが、復活の芽を絶たれてしまった。それは、浅瀬や湿地の人工的改変に加え、既に進行していた水質の悪化によって、それらの生育に適した貧（～中）栄養・弱酸性（～中性）の水質が失われたことによるものとみられる。

このようにして、今の南湖は、富栄養化に強いコカナダモ、ヒシ、スイレン（栽培種）などによって水域の大半が占められるという、本来の南湖とはまったく異なった単調な植生になっている。その反面、1970年代から知られていたイバラモに加え、最近になって確認されたオオトリゲモやイトイバラモなど、近年の富栄養化現象だけでは理解しにくい希少種の群落がみられるようになったことも事実である。したがって、今後は、水質の改善に意を払うとともにそれらの種の消長に注意する必要がある。



1970年代の南湖



2000年代の南湖



クログワイ

抽水性。棒状の細い茎を叢生し、地下にイモ状の塊茎をつける。花穂は茎と同径。

2006年8月17日(花月橋～千代の松原)
写真:黒沢高秀



カンガレイ

抽水性。茎の横断面が三角形で、葉身がない。茎頂に数個の小穂がかたまってつく。

2006年8月27日(眞萩が浦～月見が浦)
写真:薄葉 満



ウキヤガラ

抽水性。茎の横断面が三角形で、長い葉身がある。茎頂の、散房状の枝先に小穂をつける。

1993年7月1日(常磐清水付近)
写真:薄葉 満



サンカクイ

抽水性。カンガレイに似ているが、小穂に柄があり、茎が叢生する点が異なる。

2000年7月16日(松虫の原)
写真:椎名亮介



マコモ

抽水性。倒被針状線形の長い葉を出し、茎頂の花序の上部に雌花、下部に雄花をつける。

2006年8月27日(有明崎付近)
写真:薄葉 満



ミズニラ

抽水～沈水性。柔らかな針状葉を束生し、胞子のうを葉の基部につけるシダ植物。

2007年5月31日(花月橋～千代の松原)
写真:岡千照

南湖を特徴づける水生植物 (2) トウゴクヘラオモダカ



葉はサジオモダカに似ているが、花の数がより少なく粗大欠刻のある大きな花弁を持ち、雄蕊の葯が紫褐色を呈するなどの点で区別される。関東地方を中心に分布し、福島県では県南地方に局在している。また、同属のうち開花時刻が最も遅いという特徴がある。おそらく、西岸・南岸に広い湿地があったかつての南湖では、薄暮の水際に点々と白花を散りばめていたことであろうが、近年は、環境変化による消失が相次ぎ、福島県絶滅危惧Ⅰ類及び環境省絶滅危惧ⅠB類に指定されている。

<写真：南岸湿地のトウゴクヘラオモダカの写真>



ジュンサイ採り

シラカワコウホネやジュンサイが豊富にあった頃の南湖を覚えている人は、どのくらいいるだろうか。

季節の風物詩であるジュンサイ採りが最後に行われたのは、1992（平成4）年といわれる。完全に姿を消したのは1997（平成9）年頃のものである。ジュンサイの復元は地元の悲願でもある。しかし生物、特に水生生物は、同じ種類でもその地域や土地により、遺伝的あるいは形態的な変異がある。そのため、南湖のジュンサイ復元には、確実に過去に南湖

に生育していた植物由来の株を得ることが重要である。そんなことは可能であろうか？

水生植物の中には湖底の砂泥の中に休眠している種子を長期間保つことができる種類がある。一縷の望みをかけて、2006年に南湖の砂泥をふるいにかけたところ、運良くジュンサイの種子が見つかった。見つかったものの、生きていのかどうかはわからない。天に祈る気持ちで播いたところ、2つの種子から芽が出たのが確認された。2007年7月24日のことである。南湖の砂泥に埋まっていたジュンサイの10年以上ぶりの復活である。

しかし、喜んでばかりもいられない。もしも発芽した株が順調に育って植え戻しても、今の南湖ではジュンサイが定着できるか疑問である。南湖のジュンサイが失われた背景には、南湖の水質の悪化や、陸域から水域へのなだらかな地形的・植生的傾斜（エコトーン）の消失など生育環境の変化があったと考えられる。この状況は改善されておらず、現在の南湖は、比較的貧栄養の古い池を好んで生育するとされるジュンサイが生育できる環境であるとはいえない。



ジュンサイの発芽

南湖のジュンサイの復活には、湖に流れ込む水の浄化、エコトーンの創出、大繁茂しているコカナダモなどの外来植物の抑制など、ジュンサイの生育条件を整えることが必須であると考えられる。